

コロナ禍における国際教育の重要性と課題 ～「Online で世界と繋がる国際交流 days 2020」の実践から～

栗 田 聡 子

The Importance and Challenges of International Education under COVID-19 From the Practice of “International Exchange Days 2020, Connecting with the World through Online”

KURITA Satoko

〈Abstract〉

The COVID-19 outbreak has prompted major changes in educational institutions around the world. This paper begins by explaining the importance of international and SDGs education in the VUCA era, and then discusses how its importance has been increased by the corona shock. The CIER (Center for International Education and Research) of Mie University, “an environmentally advanced university,” was aware of the importance of these issues. Therefore the center has organized many events by making the most of the online media technology to promote international and SDGs education. After introducing the major events organized by the center in FY 2020, the paper discusses the indispensability of international education in the post-Corona and “beyond 5 G” generation as well as the challenges of “measuring internationalization of universities”.

キーワード：新型コロナウイルス、国際教育、留学、VUCA、SDGs、大学の国際化

1. はじめに

2019年12月、中国の武漢市で初めて確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界のあり方を一変させた。感染拡大は未だ終息の兆しを見えず、社会経済や文化に甚大な打撃を与え、それは教育にも及んでいる。キャンパスでの授業や課外活動等による交流とコミュニケーションは教育機関の責務であるにもかかわらず、コロナは学生からその機会を奪っている。本稿では、まずコロナ・ショックがもたらした変革とこの時代における国際教育の重要性を考え、SDGs教育との親和性について述べる。そして、環境先進大学をかかげる三重大学の国際交流センターがコロナ禍で企画・開催してきたオンライン・イベントの概要と結果を報告し、コロナ後の国際教育における課題や展望について考察する場とする。

2. 新型コロナに対する大学の対応

新型コロナウイルス感染症 (以下、コロナと表記) は、12 月 29 日現在で世界の感染者が 8,100 万人、死者は 176 万人を超えた (NHK WEB, 2020)。最も感染者が多い国はアメリカ合衆国で約 1,916 万人 (死者数: 約 33 万人)、日本は比較的少ないとはいえ約 23 万人 (死者数約 3,400 人) にものぼった。

未曾有のコロナ・ショックを経て、with コロナでの日常が定着しつつある中、大学を含める教育現場は変容を迫られてきた。大学はコロナ対策のため、従来の対面授業を再開するのは難しく、他国と比較して活用が遅れていたオンライン教育の重要性が飛躍的に高まり、いわば強制的にオンライン授業へ移行した。2020 年 5 月の時点で、国立大学 86 校の約 9 割が全面的に遠隔授業を実施し、後期からは対面とオンラインを組み合わせた「ハイブリッド型」の授業を実施する大学が 9 割を占めた (文科省, 2020)。

本学も、他大学と同様に、この「Zoom 元年」とも呼ばれる教育の転換期を試行錯誤しながら乗り越えることとなった。5 月から開始されたオンラインやオンデマンドを基本とせざるを得ない授業は、一部の少人数授業や実験科目を除いて現在も継続されている。

3. VUCA 時代におけるコロナ禍

このように、強いられる形で開始されたオンライン授業には、当然のことながら様々な課題が浮上している。しかし、内閣府は教育における IT 化も含め、この意識や行動の変化を「社会変革の契機」としてポジティブに受け止める姿勢を見せた。さらに、コロナ・ショックの経験と反省も踏まえて、「危機に強く、変化に対応し創造力のある人材を育むための教育改革にスピード感を持って取り組む必要がある」とも断言している (内閣府 2020, p 12)。

コロナ・ショックは、「VUCA」の時代における象徴とも捉えられるだろう。VUCA は、1990 年代後半にアメリカ陸軍戦略大学で紹介されていた概念であり (Stiehm, 2002)、2010 年代になってビジネスの業界で使用されるようになったアクロニムである。「Volatility (変動)」「Uncertainty (不確実性)」「Complexity (複雑性)」「Ambiguity (不透明性)」を意味し、総合的に「先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態」を指す (村尾, 2021)。

コロナ以前から、様々な国の政治の先行きは不透明であり、社会が分断され、資本主義というスタンダードな価値観さえも否定されようとしている。メディア技術の進化により SNS は先鋭的な主張が瞬時に世界中の人々に伝播することを可能にし、人工知能 (AI) の発展は、社会やビジネスをさらに複雑にした。さらに地球温暖化に伴う気候変動や異常気象、地震や台風、森林火災のような災害など、予測困難な事象が次々と起こっている。

このように先行き不透明な時代に突入した中、突如発生したのが新型コロナウイルスであった（堀、2017）。

コロナ禍があぶり出したのは、マスクやワクチンをめぐる自国優先主義や経済格差、Black Lives Matter 運動を引き起こした人種差別等の問題であった。言葉を換えて言えば、「人類の身勝手さと現代社会の構造のむろさ」（朝日新聞、2021）が露呈したとも言える。

その事象の1つを紹介しているのが、米国のレストラン経営者で自然災害の影響を受けた人々に食事を提供することを専門とする非営利団体、World Central Kitchen の創設者であるホセ・アンドレ氏が昨年4月、ツイッターに投稿した写真と文である（写真1）。写真の1枚は、コロナ禍で買い手がつかず、アイダホ州で捨てられた山積みのジャガイモ。もう1枚は、テキサス州のフードバンクに並ぶ車の大行列。同じ米国で、食料があり余っている一方で、食べ物に困る人たちが行列を作る矛盾。技術が進歩した豊かな時代に、この2枚の写真がなぜ同時に存在するのだろうか。アンドレ氏はTwitterで断言している。“food is not the problem but the solution”（食物が問題なのではなく、解決方法が問題なのである）。前述の「危機に強く、変化に対応し創造力のある人材を育むための教育改革」とは、まさにこのような未曾有の事態に対して、速やかに課題を解決できるような人材を育成できるような教育のことでもあるのであろう。



写真1. ホセ・アンドレ氏のツイッター投稿

4. コロナ・ショックと国際教育の親和性

人は、一般的にコンフォート・ゾーンと呼ばれる「居心地のいい快適空間」「自分の当たり前の世界」に自分を置き、「自分のやり方が一番良い・正しい」と信じ、全ての物事を自分達の基準で判断・評価する特徴があると考えられている（荒木、2015）。認知的に、新しい情報は、既知の情報ネットワークとの関連でしか認識・理解できないのであるが、これは、他の文化を否定的に判断したり、低く評価したりする態度や思想である自文化中心主義（Ethnocentrism）にも通じる特徴である。そしてその能力の限界は、生まれ育った社会に「適合」していくうえで、ある意味必要な条件であるとも考えられる。

逆に、異文化は自分の当たり前が当たり前でない世界の経験であり、コンフォート・ゾーンの外であるラーニング・ゾーンやパニック・ゾーンと呼ばれる世界に自分を置く経験を与える。異文化コミュニケーションや留学生と学ぶ国際共修授業を推進する国際教育は、コロナ・ショック以前から学生が自文化中心主義を乗り越え、「異なる価値観の間でどのように折り合いをつけられるか？」「異なる文化を背景に持つグループと協力しながら課題に取り組み、クリエイティブな発想や価値を創造し、そのプランを実現するには？」という問いに向かわせてきた（堀江，2020）。地球温暖化による気候変動がもたらす世界規模での貧困格差等の社会問題は、自文化中心主義に引っ張られず、国を超えてのパートナーシップを可能にする、「私ごと」として捉えることのできる想像力と思いやりを必要としている（堀江，2020）のである。この意味で、国際教育がゴールとして目指してきた能力や考え方は、柔軟性や適応力、創造力そして未知への耐性という人間力となり、VUCA時代のコロナ・パニックのような急激な社会変化を乗り越えるために、極めて重要であることがわかる。多様な価値観を持つ人々と協働して課題を解決していく能力を培う国際教育は、コロナ後の時代を生きるすべての学生にとって不可欠な学びであると言えよう。

5. 「先進環境大学」としての三重大学における国際教育

上記で述べたように、グローバル人材を育成する目的は、自文化中心主義的観点からの世界的競争力から、地球規模の問題解決に立ち向かうためのパートナーシップ（SDGs 目標 17）という方向へ重点が移動している。よって、教育機関、とりわけグローバル人材育成（国際教育）を担う教育関係者は SDGs（持続可能な開発目標）教育の必要性を理解し、率先して推進していく責任があるだろう。この意味で、国際教育と SDGs 教育は極めて親和性が高いと言える（栗田，2020）。

特に、「地域貢献型大学」とであると同時に「先進環境大学」を目指す三重大学は、2019 年 1 月には国連と世界の高等教育機関とのネットワークである国連アカデミック・インパクト（UN Academic Impact：UNAI）に加盟し、4 月には「THE 大学インパクトランキング 2019」の SDG 12（つくる責任つかう責任）において、日本国内で 1 位、世界で 31 位にランクインした。2020 年は、SDG 4（質の高い教育をみんなに）において、日本国内で 1 位タイにランクインしている（三重大学，2020）。

このように、三重大学が取り組んできた国際教育は、コロナ以前より SDGs の線上にあった。昨年は、この SDGs 教育を推進する目的から本学新制 70 周年記念行事として中部国際空港と県庁との産学連携事業である「未来を創るのは私たちだ。」と題した講演会を開催した。招聘したのは、2015 年より「持続可能な開発のための教育（ESD）円卓会議」

の委員も務められている辰野まどか氏（グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）社団法人代表理事）であった。GiFT が実施しているグローバル教育は、「グローバル・シチズンシップ（地球志民）」育成を掲げている。辰野氏の、学生に話しかけるようなコーチング形式での講演は、ふだんは世界がかかえる課題や海外での出来事についてほとんど興味を持たない学生層の意識や自己効力感を高めた点で、極めて効果的なアプローチであった（栗田，2020）。

6. コロナ禍の国際教育：本学のとりくみ

オンラインでの授業は、対面でなければ効果が上がらない実験や作業を有する内容ではマイナス面が多く、コミュニケーションの面でも不完全なことから課題が多い。しかしながら、その一方で、オンラインという時空を超えたヴァーチャル空間は、国際教育の授業やイベントにとって利点も多い。なぜなら、海外に在住している人々との交流が机上で、それもリアルタイムで実現するからである。海外から招聘する費用も時間もカットできる点は、コロナ前では実施が困難であった事業の実現性を飛躍的に高めた。

「先進環境大学」としての国際教育を目指す本学の国際交流センターは、オンラインという環境の強みを生かし、留学生説明会や交流会だけでなく、SDGs を推進する数々のイベントを企画・実施してきた。毎年 11 月から 1 月、数々のイベントを開催してきた「国際交流 days」は、本年度は「世界とつながる国際交流 days 2020」と題し、10 以上ものイベントを企画した。表 1. は、2020 年度にセンター主催で実施した国際教育関連の主なイベントと、これから年度末に実施予定のイベント・リストである。

6.1. SISA（Students who are Interested in Studying Abroad）登録の募集

国際交流センターは、コロナ禍で学生への連絡方法やイベントがオンラインに限定されることを考慮し、コロナ以前から計画していた SISA の募集を新学期とほぼ同時に開始した。主な目的は、「留学奨励のための海外留学情報や国際交流関連情報の周知」である。基本的に、留学に関連する情報や国際教育イベントは、UNIPA（Universal Passport）のメールシステムを用いて全学に周知をしているのだが、日々大量の情報を UNIPA も含めて受信する学生の大半は、メールのタイトルも読まないことが多いと聞く。そこで、①コロナ禍でさらに増加している大学からの連絡メールに紛れて留学情報を見逃さないように、②留学や国際交流等に興味を持つ学生のみに送信すべき内容のメールを送ることができるように、SISA 登録を募集した。結果、1 回の募集で 182 名からの登録申請があり、登録時のアンケート結果から、以下のような特徴が参加者にあることがわかった。

表 1. 2020 年度 三重大学国際交流センター主催の主なイベント（オンライン）

開催日時	イベント	主な登壇者	参加者	主な目的	海外からの参加
7/29 ランチタイム	留学説明会①	留学経験者 2 名 スペイン・ジャウメプリメル大学 国立高雄師範大学	30 名 (本学学生)	留学促進	
7/30 ランチタイム	ドイツ day (交流会と 留学説明)	ドイツ人留学生 8 名 留学経験者 (工学部院生) ハイデルベルク大学	27 名 (本学学生)	留学促進 国際交流	
11/13 ランチタイム	留学説明会② 英語圏	留学経験者 (人文学部生) タスマニア大学	40 名 (本学学生)	留学促進	タスマニア (オーストラリア)
11/20 ランチタイム	Lunch Time New York①	NY 国連フォーラム幹事 (津市出身)	39 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 SDGs 教育	N Y (米国)
11/26 13:00-14:30	タスマニア大学 生との交流会①	タスマニア大学生 7 名	20 名 (本学学生)	国際交流	N Y (米国)
12/3 16:30-18:00	国連 75 周年 記念 in 三重大学	国連広報センター所長	201 名 (本学学生・ 教職員・一般)	国際教育 SDGs 教育	ドイツ・ N Y (米国)
12/8 ランチタイム	Lunch Time New York②	NY 国連フォーラム幹事 (津市出身)	36 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 SDGs 教育	N Y (米国)
12/10 ランチタイム	留学説明会③ (台湾・韓国編)	留学経験者 2 名 梨花女子大学 (韓国) 国立高雄大学 (台湾)	約 30 名 (本学学生)	留学促進	
12/14 ランチタイム	トビタテ！第 14 期募集説明会	留学経験者 2 名 ノースフロリダ大学 (米国) テキサス大学 (米国)	27 名 (本学学生)	留学促進	
12/15 ランチタイム	Lunch Time New York③	NY 国連フォーラム幹事	22 名 (本学学生・ 教職員)	国際教育 留学促進	N Y (米国)
1/22 18:00-19:00	タスマニア大学 生との交流会②	タスマニア大学生 9 名	本学学生 (人数未定)	国際交流	タスマニア (オーストラリア)
2021/1/27 ランチタイム	韓国メディア と文化	インディアナ大学講師	本学学生・ 教職員 (人数未定)	国際教育	ソウル (韓国)

- 1年生の登録が多く（図1. 参照）、人文学部が最多。全体的には、女子が6割。
- 登録理由として最多は「海外留学への興味」であるが、「留学生との交流」希望者も多い。交流を希望する割合は、学年が上がるほど増加している。（図2. 参照）
- 最も人気の留学プログラムは「三重大主催」で「短期の語学留学」
- 留学先の希望は、順に「北米」「ヨーロッパ」「オセアニア」（約8割）
- 海外留学で不安な要因として、トップは「留学費用」であり、ついで「言語能力」
- 留学生との交流に対して、9割の学生が「（大変）興味がある」ことが判明。交流したい留学生の出身は特に「北米」「ヨーロッパ」が多い。

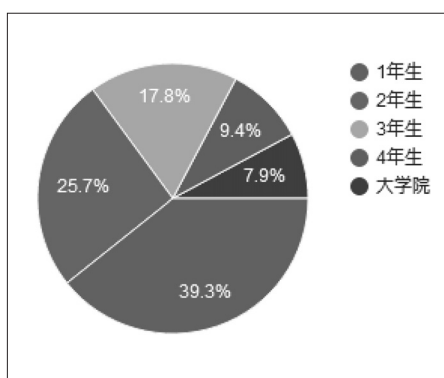


図1. SISA に登録した学生の内訳（学年）

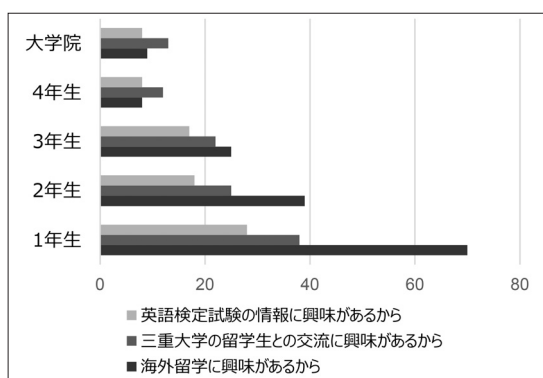


図2. SISA に登録した理由（学年別）

6.2. 留学推進イベント（計4回）

コロナ禍で、他大学と同様に今年度の留学は短期・中長期（交換）留学共にすべて中止となった。2017年以来、国際交流センター主催の夏期語学短期プログラムとして恒例となっていたカナダの名門ブリティッシュ・コロンビア大学英語プログラムだけでなく、今年度の春期に向けて企画、はじめて実施する予定であったポートランド州立大学英語学校でのSDGsプログラム、そしてNYマンハッタンで英語を学びながらインターンシップを経験するプログラムも残念ながら中止となってしまった。

大学入学以前から「学生時代に留学したい」と考えている学生は多い。留学に興味や憧れを抱いてSISAに登録している学生ら（特に1年生）の興味とモチベーションを維持するためにも、草の根活動としてのオンライン留学説明会を実施していく必要性があった。

例年4月に実施していた留学オリエンテーションのかわりに、先の見通しがないまま現状報告も兼ねて7月に第1回目の留学説明会を開催。「トビタテ！」募集の説明会を含め、計4回の留学説明会とドイツ留学の紹介（7/30のドイツdayにて）を学生が参加しやす

いランチタイムに開催した。

それぞれの説明会では、担当者からのオンライン短期留学や交換留学の紹介や事務手続きの説明と共に、交換留学を経験した在学生在が留学体験を報告。留学先は、台湾やスペイン、ドイツやオーストラリア、アメリカ等、多岐にわたっており、それぞれが留学費用から日常のスケジュール、授業のサバイバルの仕方、休日の過ごし方まで、沢山の魅力的な写真を紹介しながら報告してくれた。対面で実施した場合と同じく、留学帰国者からの体験談は、参加学生の満足度を向上させ、留学への興味を強めてくれる鍵である。留学先は異なっても、留学を実現し、様々な弊害を自ら乗り越えてきた先輩からのメッセージは、説得力と重みがある。留学を経験した彼（女）らに共通しているのは、「文化や価値観の違いを尊重し、受け入れることの楽しさ」であり、「いかに自分が世界、ひいては日本について無知であったか」という気づきであるようだ。

以下は、ハイデルベルク大学（ドイツ）に半年間留学した工学部院生の言葉である。「留学という経験を通して得られた自分の価値観や交友関係、苦難、感動というものは留学した人じゃないと得られません。（中略）今皆さんがいるのは三重大学であり、留学に対して少しでも行動すればたくさん回答を出してくれる人が自分の周りにはたくさんいることを忘れないでください。私はその人たちに背中を押され、助けられ、念願だった留学をかなえることができました。その方々に深く感謝するとともに、より多くの人が三重大のすばらしさに気づき、世界に目を向けることができる場であることを知ってほしいです。」

第 2 回目の留学説明会（英語圏）では、オーストラリアのタスマニア大学に留学している学部生から、オンライン経由で留学の報告をしてもらうことが出来た。留学途中でオンライン授業になってしまった彼女だが、十分に留学生生活を満喫できたとのこと。Q&A では、「いつから留学の準備をしましたか？」「すべて英語での授業は大丈夫ですか？」等の、参加者からの質問にも次々に返答。日本とタスマニアは時差が 2 時間だけであることで、国際交流イベントも時差が激しい欧米の大学と比較して企画しやすいという利点もあった。

2021 年度「トビタテ！」募集の説明会は、司会も同事業の奨学金で過去に米国の大学院に留学した大学院生 2 名が務め、工学部の学部生を中心に多くの参加があった。司会進行をすべて学生に任せることで話しやすい雰囲気になったこともあり、Q&A では予定時間を超えて質疑応答が活発に続いた。

6.3. 国際交流イベント（計 3 回）

コロナ前に前述の SISA と名付けたメーリングリストを作成した際、登録希望の理由として予想以上に多かったのが「三重大学の留学生との交流に興味があるから」であり、学

年が上がるほどその傾向が高いことがわかった。また、自身の英語レベルの向上のために、欧米からの留学生と交流することを望む学生も多いことが判明した。

だが、コロナの収束が見込めない中でオンライン授業となり、正規生が留学生と共に学べる国際共修の機会や、交流する機会が失われた。留学生にとっても、日本に留学しながら対面で日本人学生らと交流する機会が失われたことは、本来の留学の目的が半減したことになるであろう。そこで、7月30日に「ドイツ day」と題し、コロナ以前の2019年より留学していたドイツ人留学生7名が帰国する前に、自国の文化や政治、自分の大学（ハイデルベルク大学やライプツィヒ大学等）を紹介し、三重大生と交流するイベントを開催した。留学生らは、恒例のクリスマス・マーケットや、デザインの美しい大学図書館などの写真を見せて、熱心に紹介してくれた。日本人学生からの「コロナ禍で寮に滞在する自粛期間が長かったと思いますが、留学はいかがでしたか？」との問いに、「すごく楽しかったです。海岸で散歩したり、ドイツよりも感染者数が各段に少ない津市にいて、本当にラッキーでした」などと、ドイツ人学生らは流ちょうな日本語で日本人学生らを驚かせた。「皆さんにお会いしたいのですが、どこに行ったら会えますか？」という女子学生の質問に対しては、「コロナなので、皆さんとお会いするのは難しいです」とドイツ人学生。今後、コロナの収束が長引くようであれば、オンラインでの国際交流イベントを定期的に実施する必要があるだろう。

11月には、協定校であるタスマニア大学のJapan Societyに所属する7名の学生とのオンライン交流会を開催、著者の授業である「メディアと日本」（日本人正規生20名）で、まず試験的に実施した。同イベントを実施する目的は、本学学生との交流以外に、タスマニア大学との協定関係を維持することにもあった。協定締結以来、本学から留学派遣する学生はほぼ毎年いる一方で、先方から本学に留学する学生は過去数年ゼロという一方通行の関係が続いている。その不均衡を是正して「公平な協定関係」を目指すためにも、本学への留学をタスマニア大学の学生らにアピールする必要がある。「日本のどこが好きなのか？」「日本で行きたいところは？」等の日本人学生からの質問に、タスマニア大学の学生は英語混じりの日本語で丁寧に答えてくれていた。さらなるタスマニア大学生と三重大生との交流を深めるため、1月22日にはお互いの大学をそれぞれ紹介する時間も設けた交流イベントを予定している。

6.4. 国際教育としてのSDGs推進イベント

前述したとおり、環境先進大学を掲げる本学が促進するSDGs（持続可能な開発目標）に即した国際教育を実現するべく開催したイベントの中から、特に注力した国連75周年

記念の事業と、3 回シリーズで開催した Lunch Time New York のイベントを紹介する。

A. 国連 75 周年記念 in 三重大学「未来を創るのは私たちだ。」

12 月 3 日、国際連合 75 周年の記念と SDGs の推進を目的とし、昨年に引続き「未来を創るのは私たちだ。」の第二弾として、国連広報センターの根本かおる所長を招聘して webinar 講演会を開催した。参加者は、本学の教職員以外に、SDGs に興味を持つ個人や企業を含め、国内外から 200 名を超える大規模なイベントとなった。

はじめに、吉松国際担当副学長より「三重大学とそのゴール」として、本学が取り組んでいる教育プログラムの概要と特色について紹介があり、続いて「SDGs を羅針盤に、世界を転換する～ SDGs を自分事に、あなたもチェンジメーカーに～」のタイトルで、根本所長の講演がスタート。根本所長は、「もし、コロナ以前に、SDGs が進展していたならば、ここまでの打撃にはならなかった。」と語り、「コロナ後の 10 年は、Decade of Action として、元の世界へ戻るオールド・ノーマルでなく、SDGs を羅針盤にして『より良い復興』に向けて加速していく大事な年であり、そのためには若者の力が不可欠である」と、強く語られた。

また、講演会の半ばでは、『企業の環境や社会の課題に対する取り組み方』に対して参加者がどれほど意識しているか、に関してリアルタイムのアンケート調査を実施した。学生の参加者の約 80% が、「就職先を考える際に（やや）意識する」と回答し、根本所長からは「皆さんの意識は（平均よりも）かなり高いです」とのコメントがあった。

後半では、「根本所長への質問コーナー」を設け、冒頭から国内外から参加している 4 名の質問者に、それぞれ丁寧にお答えいただいた。4 名の構成は以下のとおり。

①中田知沙さん（大学院博士後期課程：生物資源学研究科）

質問：日本における「男女格差の縮小」について（SDGs 目標 5）

②トアベン・シュテグミュラーさん *ドイツのハイデルベルク市から

ハイデルベルク大学日本学科 3 年生：日研生として昨年度本学で 1 年間学んだ

質問：日本の食文化と環境保全の問題について（SDGs 目標 13 & 14）

③中山堯之さん（医学部 6 年生）

地域での臨床実習の現場で様々な事情や意見を持つ患者やご家族等を目の当たりにし、異なる意見をまとめていく困難さを経験。

質問：異なる意見をまとめていく上で、大切にされていることについて（SDGs 目標 17 他）

④古市裕子さん *アメリカの NY 市から

津市出身・会社経営者・国連フォーラム NY 幹事所属：コロナ禍の NY で、BLM や選

拳運動など、世界をより良くするために若手層（Z 世代）が運動しているのを目撃してきた。

質問：私たち大人ができること、次世代に渡していくべきこと、について。

上記 4 名の質問は、それぞれ図 2 のように powerpoint にまとめて Zoom 上で提示された。特に根本所長が時間をかけて回答されたのは、最初の質問「日本が先進国の中で最も低い評価を受けている「男女格差の縮小」を改善するために必要なこととは？」に対してであった。その理由は、アントニオ・グテーレス国連事務総長が 2020 年の優先課題としてジェンダー平等を「気候変動」とともに挙げていたからだけでなく、根本所長の個人的な経験によることがわかった。根本所長は、『『女性の活躍推進』は、日本にとって極めて重要な課題であるが、その指針を決める場が、ほとんど男性で占められており、当事者がいないというのが問題。私は、三重大大学の方々にお聞きしたいのですが、教授レベルでの女性の割合はいくらですか？学部長、理事レベルでは？きちんと取り組んでいますか？』と参加者全員に向かって尋ねられ、国連の現在の役員の半数以上は女性であると話された。「日本の女性はあきらめるのではなく、成果を上げながら、時には怒りをぶつけることが必要であると思います」とご自身のキャリア経験も絡めて回答された。

NY 在住の古市さんからの質問「今、大人ができること、次世代に渡していくべきこと

とは？」に対しては、「#Me too 運動でも、原動力になっているのは、若いエネルギー。そのエネルギーを吸い上げ、上手にポジティブなうねりを作ることが大人世代の責任。そのためには、政府、自治体、大学等が、若者に政策立案、決定の段階で関わってもらう機会を与えることが極めて重要だと思います」と力強く言われた。（その他の回答については国際交流センター HP を参照：<https://www.mie-u.ac.jp/international/news/cate-intl/75-in.html>）

イベント後に実施した参加者のアンケート結果によると、9 割以上の方々が「参加して（大変）良かった」と回答してくれた。以下は、参加者のコメントの一部である。



図 3. 「根本所長へ質問」コーナーでの ZOOM 画面

- 根本先生が仰るように、SDGs は教養教育として、可能ならば大学全学部必須の基礎科目として、開講するのが一番いいと考える。(学部生)
- なかなかお話を聞く機会がない根本さんの話を聞くことができてよかったです。(学部生)
- 気候変動をはじめとした様々な問題で若者が割を食っている。ゆえに若者は声をあげるべき(行動すべき)というご提案を伺い、「未来を創るのは私たちだ」とした講演タイトルが腹落ちしました。貴重なご講演をいただきありがとうございました。(三重大学の教職員)
- 素晴らしい講演会でした。私も勉強し、行動します。(日本語教師ボランティア)
- SDGs の講座を定期的開催なさってください。期待しております。(一般)
- 私は高知県の企業で中間管理職をしておりますが、SDGs に関し自らの一步を踏む出すこともそうですが、今後 17 のゴールを目指す若い世代の受け皿となるべく企業を成長させていく必要性を強く感じました。(会社員)

イベント終了後に、根本所長から、「今回のイベントは、手応えを感じた」とのコメントをいただいた。通常、Webinar 講演会は、講演者と司会のみがビデオで顔出しをし、参加者の表情も見れない中で、講演者は話することになる。参加者の大半が学生である場合、講演後に質疑応答の時間が用意されていても、質問する学生は少なく、皆無で終わることもある。それらを考慮して、本イベントでは後半に出演する 4 名の質問者も冒頭からビデオ付きで参加してもらったことで、根本所長には、彼らの反応を表情から読み取りながら話をすすめていただく事ができた。その ZOOM 上での双方向的な表情のやりとりが、イベント全体の雰囲気と進行にポジティブな影響を与え、「投票する」ことの高揚感やリズムの変化も加わって、参加者の高い満足度 zu 貢献したと考えられる。

B. Lunch Time New York (3 回シリーズ)

11 月 20 日 (金)、12 月 9 日 (水)、12 月 16 日 (水) のお昼に 3 回シリーズで開催した。お話をくださったのは、常に世界を牽引する影響力のある街であり、今回のコロナ感染拡大で最も深刻な被害を受けた NY に住む女性経

Mie University CIER Presents
国連創設75周年記念 IN 三重大学

未来を創るのは、私たちだ。
Shaping our future together

【日時】2020年12月3日(木)
16:20~18:00
【プラットフォーム】Zoom webinar
【講演】根本 かおる氏
国連広報センター所長

「コロナ後の世界で、国際連合と若者の役割とは？」
今年、国連は創設75周年を迎えています。その中、コロナ禍で世界は大きな困難に直面し、さらにより深刻な危機に直面しています。この困難を乗り越えるためには、国際連合と若者の役割はますます重要になります。コロナ後の世界で国際連合と若者の役割とは何か、そして、国際連合と若者が世界を創るために何をすべきか、について、根本所長が講演します。根本所長は国連広報センター所長として、国連広報活動を通じて、国際連合と若者の役割について、世界中の人々に伝えています。

根本 かおる氏 (国連広報センター所長)
東京大学大学院、学芸学部を経て、米国コロンビア大学大学院より国際関係学修士号を取得。1998年より国連広報センター所長に就任。2004年に国連広報センター所長に就任。2004年から2010年まで国連広報センター所長に就任。2010年から2015年まで国連広報センター所長に就任。2015年から2020年まで国連広報センター所長に就任。2020年から現在まで国連広報センター所長に就任。

参加のお申込み まで 11/30 (月)
①お申し込み QRコードを読み取り、応募フォームからお申込みください。
<https://forms.gle/ky5LberrfDQ5M4dHd>
②後日、メールにてアクセス用の Zoom 開催情報を送信いたします。
お問い合わせ：三重大学国際交流センター E-mail: kokusai@ab.mie-u.ac.jp
主催：三重大学国際交流センター
Center for International Education and Research (CIER)

図 4. 国連 75 周年記念イベント (ポスター)

営者、古市裕子氏（12/3 の国連イベントで質問者として参加）。古市氏は、約 25 年前に国連を目指して渡米し、NY 市立大学大学院（政治経済学科・国際関係論）で修士を取得。ユニセフにポジションを獲得しながらも、911 の騒動で流れてしまい、ジェトロ NY に 17 年勤務されたとのこと。2015 年に国連が SDGs を採択したことをきっかけに起業され、現在は Z 世代（デジタルネイティブ世代）と共に SDGs ビジネスを創生するプロジェクトに取り組まれる一方で、NY 国連フォーラムの幹事も務められている。

オンラインを通じて、マスメディアからは知ることが難しいコロナ禍のアメリカと NY の実情、留学や SDGs について、古市氏は、情熱的に、話題満載で話された。こちらでは Lunch Time でも NY では 22 時からの開始であるが、毎回 1 時間以上延長して参加者からの質問に丁寧に返答してくださった。コロナ禍で留学を実現できず鬱々とした気分の学生や、留学経験のある学生や教職員、SDGs を推進する教職員らと共に、様々な話題で盛り上がった。

不確実性が高い VUCA 時代には、「世界で何を起こっているのか」を知り、日々アンテナを張って様々な情報を集め、好奇心が高く、教養を兼ね備えた人々と議論を重ね、常に自らを向上させる必要がある。でなければ、時代から取り残されるばかりでなく、予期せぬ出来事に直面した時に慌てることになるだろう。Lunch Time New York のようなイベントは、学生が、将来自分の人生の舵取りができるように促す、大切な役割があると考えられる。

以下は、各回のイベントの概要である。

◆ 第 1 回目（11/20）「大統領選とコロナ&Black Lives Matter」

「マンハッタン」と呼ばれる地域、ロックダウンでゴースト・タウン化した地下鉄や街の模様、州別の大統領選結果から見える米国、ジョージ・フロイト氏の事件と運動のきっかけとなった Z 世代による SNS の力、等についてお話いただいた。白人至上主義者らが、BLM 運動の被害と見せかけて割った数々の商店の窓ガラスの写真も紹介された。

◆ 第 2 回目（12/9）「SDGs とビジネス・Z 世代：コロナと BLM で劇変するアメリカ社会事情」

米国で多大な影響力を持つ Z 世代が重要視する SDGs、ビジネスに影響を及ぼす彼らの「キャンセル・カルチャー」（不買文化）、日本で大ヒットしている「鬼滅の刃」との共通点等について、興味深いお話をうかがった。

◆ 第 3 回目（12/16）「留学とキャリア&NY」

「皆さんにお聞きます。ご自分の人生はラッキーだと思いますか？」という古市氏の問いに、参加者の 67%が「はい」、33%が「まあまあ」と投票で回答（「いいえ」はゼロ）。

古市氏は、人を雇用する際、「はい」と即答できる人のみ採用するそう。人生の谷も含めて「ラッキー」と言える強さと前向きさが重要とのことであった。

このイベントも、参加者のアンケート結果によると、9 割以上の方々が「参加して (大変) 良かった」と回答してくれた。以下は、参加者のコメントの一部である。

■ 日本のニュースを見ているだけで

はわからないアメリカの現状や、BLM の裏側を知ることができてとても良かったです。Z 世代という言葉も初めて聞いたのですが、私と同年代の方々が社会に対して行動を起こしている事実とパワーにとっても感動しました。(学部生)

■ アメリカの Z 世代の方々は、環境や差別などに敏感だということを、今回の古市さんの説明で知ることができました。凄く勉強になりました。ありがとうございます。(学部生)

■ 国際人の生の声を聞かせて頂けて幸運でした。(学部生)

■ このような企画が全学部に広まると良いですね。(教職員)

■ ランチタイムというのが参加しやすく、よかったです！(学部生)



図 5. Lunch Time New York (ポスター)

6.5. その他のイベント

1 月 27 日の昼休みに開催予定の「韓国メディアと文化&ソフトパワー」(ソウ ヨニ博士: インディアナ大学) は、使用言語が英語であるにもかかわらず、100 名を超える参加申し込みがあった。BTS をはじめとした K-POP の人気は世界を席巻しており、映画「パラサイト」が昨年の第 92 回アカデミー賞で作品賞を含む最多 4 部門を受賞したことからわかるように、韓国が作り出すメディア・コンテンツは国家のパワーとなっている。今年度、本学教養教育院の韓国語授業は非常勤講師の都合で不開講となったらしいのだが、消沈した学生も多かったのではと推測される。

その他、国際交流センター主催でなくとも、海外とオンラインで結んで開催した事業が他部署で実施されている。例えば、12 月 11 日には、国の登録有形文化財でもある本学のレーモンドホールに因んだ「三重大学レーモンドホール・リモートレクチャー: ノエミ &

アントニン・レーモンド 祖父母の思い出」と題した文化的なイベントが施設部主催で開催された。米国から故レーモンド氏の孫がゲストとして登壇し、大好評であったと聞いている。12月開催であったこともあり、国際交流 days の一環としてセンター HP に掲載した。コロナ後は、当センターにおいても、上記の施設部を含め、教養教育院や国際環境教育センター、そして各学部と、積極的に連携していく必要性がさらに高まるだろう。

7. まとめと考察

7.1. 国際教育の重要性とオンラインの利点

新型コロナウィルスの感染拡大により、身体の物理的な移動を伴う留学の派遣と受け入れを担当する国際交流センターは大きな影響を受けた。同時に、先行き不透明な VUCA 時代に発生したコロナ・ショックは、国際教育の重要性と意義について再認識させる機会でもあったと言える。なぜならば、異文化コミュニケーション能力の醸成を重要視する国際教育は、学生を自文化中心主義的な考え方から脱却させ、多様性の中での協働を促すものであるからである。その意味で、国際教育のゴールは、もはや国家間の競争で勝つためのエリートを育成するというよりは、先行き不透明な時代を自らの判断と行動力で生き抜き、世界や社会が抱える喫緊の課題に取り組める人材を育成することにあるのだろう。

環境先進大学をかかげる三重大学にとっては、12月に開催した国連 75 周年記念イベントで根本かおる氏（国連広報センター所長）に助言いただいたように、国際教育としての SDGs 教育をさらに加速していく事が望まれている。そのためにも、逆に、新たな価値観が創出されていく過渡期である現在にあって、その国際教育の意義と重要性を正しく認識できない大学に持続可能な未来はないと考えられる。

本年度、本学の国際交流センターは、上記の重要性を実感していた教員（著者）が中心となって 10 以上のイベントを企画・運営・実施し、留学や海外渡航の機会を奪われた参加学生のモチベーションの低下を防ぎ、地球規模の課題を認識させ、同年代の若者たちが声を上げて行動している事実を提示することで、ある一定の刺激を与えることに概ね成功したと考えられる。国連 75 周年記念イベントに授業の一環として参加した学生のアンケートの中には、根本所長が紹介した動画やデータに刺激されて初めて SDGs に興味を持つようになった、という回答も多く見られた。

実は、国連には根本所長のご登壇を 2019 年から依頼していたのであるが、東京から三重県までの行程を考えると過密スケジュールの中での参加は困難、との回答をいただいていた。それが、4月に入って改めてオンラインでのご登壇を依頼したところ、快諾していただいたという経緯がある。このように、オンラインが持つ利便性は、海外だけでなく国

内においても、時として、主催者側、参加側双方に大きな恩恵をもたらす。

7.2. コロナ後の大学の国際化と評価

本稿では、コロナ禍で実施した（または実施予定の）国際交流センター主催のイベント（国際教育関連）を報告してきたが、コロナは高等教育機関の国際教育や国際化における評価にも影響を与えている。

イギリスの Times Higher Education (THE) 日本版は大学の教育力を重視しているが、このランキングを決定する 4 つの指標のうち 1 つが「国際性」で、「外国人の学生／教員比率、留学比率、外国語による講座の割合」から構成されている（ベネッセホールディングス、2020）。

2008 年、文部科学省によって策定された計画の一つ「留学生 30 万人計画」は、「日本を世界に開かれた国とし、人の流れを拡大していくために重要である」（文科省、2008）として打ち出された。「大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等」（文科省、2016）によると、「意欲と能力のある全ての学生の留学実現に向け、日本人留学生を 12 万人に倍増し、外国人留学生を 30 万人に増やす」との決定が記されている。2019 年にはその目標数である 30 万人を達成しているが、コロナ禍にあって先行きに不透明感が出ている（日経、2020）。同様に、コロナの感染拡大は、海外の大学や語学学校への留学も阻んでおり、今後「大学の国際化」を測定するための評価基準に変更を求められることが予測される。新たなウィルスの変異種が発見され、完全な終息が見えない中で、物理的な移動を伴う留学の派遣と受け入れ数値を教育機関の国際化として指標とするのは現実的ではない。

では、コロナ後、または with コロナの時代における、「大学の国際化」はどのようにして評価されるべきなのであろう。この大きなテーマについて議論する事は本稿の域を超えるので無理である。だが、コロナ禍でさらに深刻化した経済格差や高騰している航空運賃を考慮すると、移動をともなう従来型の留学は以前よりも高価なものとされ、代替案としてオンラインを通じての海外協定大学の学生との交流や、様々な分野のプロジェクトに共に取り組む COIL（Collaborative Online International Learning）型教育が文科省のサポートを受けてさらに発展していくと予測される。身体的な移動を伴わない COIL 型の国際交流や国際共修は、財政的に留学の実現が困難な学生だけでなく、移動が難しい障がい学生の多くが参加可能になるだろう。この意味で、「誰も取り残さない」「質の高い教育」という SDGs の大前提と目標を実現するものと言えよう。

7.3. Beyond 5G 時代における国際教育の標準化

今後、国際教育は5G時代の幕開けと共に加速し、国家間の地理的距離がさらに縮小していくことで、教育の国際化がスタンダードになっていくと予測される。COIL型教育が当然のように全学教育だけでなく、学部での専門教育、大学院研究室にも取り入れられる時代が来るであろう。だが、このままBeyond 5Gに突入してヴァーチャルと現実（対面）の境がさらに曖昧になっていく（総務省，2020）ことは、メディア業界におけるMega Media（巨大メディア企業）のように、大学教育におけるMega Universitiesの誕生に突き進む時代に突入していく可能性を秘めている。実際、授業料が高騰し続けている米国では、ハーバード大学のような名門私立大学だけでなく、UCLAを含む州立大学の授業料まで高騰しており、授業が支払えない学生の中には、有名大学等が安価で提供しているオンライン版授業を選ぶ者が増加している（ドキュメンタリー映画『Ivory Tower』（2014）より）。

政府がコロナで打撃を受けた社会経済や経済格差の問題解決に取り組む一方で、各大学は、到来する時代に即した教育指針を独自のビジョンと実行力を伴って推進していく必要がある。地域型貢献大学として環境教育やSDGs推進する三重大大学であるが、Beyond 5G時代を見据え、情報と共に国際教育がスタンダードになると予測される世界に取り残されることがないように、着々と準備する必要があるだろう。

先が不透明なVUCA時代の中でも、自らの羅針盤を頼りに進み、人生の舵取りができる学生を育成することを目標とする国際教育。その国際教育を担う機関の役割は、世界的にもますます重要視されている。その重要性が、本学を含めた全ての教育機関に正しく認識されることを希望してやまない。

〈参考文献〉

- 荒木博行（2015年6月29日）「コンフォートゾーンとは、そこから抜け出して成長する方法とは？」『グロービス』2020年12月27日アクセス〈<https://globis.jp/article/1369>〉
- 河原田慎一（2021年1月3日）「ベネチアの水が透明に コロナ禍に浮き出た人間の身勝手」『朝日新聞デジタル』2021年1月3日アクセス〈https://digital.asahi.com/articles/ASNDT63V3ND8UHBI005.html?iref=pc_rellink_04〉
- 栗田聡子（2000）「産学官連携によるSDGs教育とグローバル人材育成事業の実践 ～中部国際空港協議会/県庁との海外渡航啓発事業第2弾～」『三重大大学国際交流センター紀要』第15号 pp.95-111.
- 総務省（2020）「Beyond 5G推進戦略－6Gへのロードマップー」2021年1月12日アクセス〈https://www.soumu.go.jp/main_content/000696613.pdf〉

- 内閣府 (2000)「経済財政諮問会議 (オンライン教育の重要性と課題)」p 12. 2020 年 12 月 27 日アクセス <https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/minutes/2020/0708/shiryo_01-3_2.pdf>
- 日本経済新聞 (2020 年 4 月 22 日)「外国人留学生最多 31 万人 計画達成も先行き不透明」2021 年 1 月 11 日アクセス <<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58361130S0A420C2CR8000>>
- ベネッセホールディングス (2020)「THE 世界大学ランキング日本版 2020 発表」2020 年 12 月 27 日アクセス <https://blog.benesse.ne.jp/bh/ja/news/20200324_release.pdf>
- 堀義人 (2017 年 1 月 11 日)「VUCA 時代、リーダーに重要な 4 つの言葉」2020 年 12 月 27 日アクセス <<https://www.nikkei.com/article/DGXXZO11343490V00C17A1X12000>>
- 堀江未来 (2020 年 10 月 1 日)「新型コロナ禍で加速するオンラインでの学びとこれから」『立命館アジア太平洋大学 Online FD Seminar』(講演内容より抜粋)
- 三重大学 (2020)『『THE 大学インパクトランキング 2020』の SDG 4 (質の高い教育をみんなに)において日本国内で 1 位タイにランクインしました』『大学トピックス』2020 年 12 月 23 日アクセス <<https://www.mie-u.ac.jp/topics/kohoblog/2020/05/the2020sdg41.html>>
- 村尾 佳子 (2021 年 1 月 8 日)「VUCA とは? 予測不可能な時代に必須な 5 つのスキルと OODA ループ」『Globis Career Note』2021 年 12 月 23 日アクセス <<https://mba.globis.ac.jp/careernote/1046.html>>
- 文部科学省 (2020)「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 (第 5 回) コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」2020 年 12 月 28 日アクセス <https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf>
- 文部科学省 (2016)「資料 5 大学のグローバル化に関する閣議決定・提言等」2020 年 12 月 23 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/036/siryo/attach/1338083.htm>
- 文部科学省 (2008)「留学生 30 万人計画」骨子の策定について」2021 年 1 月 4 日アクセス <https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm>
- 文部科学省 (2008)「各大学や第三者機関による大学の国際化に関する評価に係る調査研究について」2021 年 12 月 23 日アクセス <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/025/gijiroku/08121011/006.htm>
- Andres, J. (2020, April 30) . Please wear a mask! Twitter. Retrieved December 27, 2020, from <https://twitter.com/chefjoseandres/status/1255671337667919872>
- NHK WEB (2020 年 12 月 29 日)「新型コロナ 世界の感染者 8100 万人 死者 176 万人 (29 日午前 3 時)」2020 年 12 月 29 日アクセス <<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201229/k10012789141000.html>>
- Rossi A. (2014) *Ivory Tower. Is college worth the cost?* [Film]. CNN Films.
- Stiehm, J. (2002) . *The U.S. Army War College: Military Education in a Democracy*. Philadelphia: Temple University Press.